

## 昭和初期における「創生玩具」の研究動向に関する 考察：これまでの研究と今後の課題を中心に

鳥越，久美子

九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻（近現代日本文化史）：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1906388>

---

出版情報：教育基礎学研究. 14, pp.131-141, 2017-03-24. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



研究ノート

## 昭和初期における「創生玩具」の研究動向に関する考察

— これまでの研究と今後の課題を中心に —

鳥 越 久美子

### はじめに

本論文は、昭和初期に展開された「創生玩具」に関するこれまでの研究、および今後の課題を考察することを目的とする。

まず「1. これまでの研究」では、「創生玩具」に関するこれまでの研究を取り上げる。そして、「2. 今後の課題」ではこれまでの研究において見落とされていた点を明らかにし、今後の課題について論じていく。

### 1. これまでの研究

この昭和初期における「創生玩具」については、入江繁樹の研究（2007年）および加藤幸治の研究（2011年）で論じられている。入江の研究では有坂興太郎の「創生玩具」論に着目することによって、明治期からの趣味家による「郷土玩具」に対するまなざしへの批判を込めたものとして論じられている。一方、加藤の研究は、昭和初期における「郷土玩具」の新作および廃絶玩具の復興という展開から「創生玩具」を論じている。そこで以下では、入江と加藤の研究について詳しくみていくこととする。

#### 1-1. 明治期からの「郷土玩具」に対するまなざしへの批判として「創生玩具」を論じた研究

入江繁樹は有坂の「創生玩具」運動について、「昭和初期当時の支配的な「郷土玩具」観に対する、有坂の批判意識から出発していた。つまりかれは、「郷土玩具」とは本来だれのために、何のために存在するかという観点から、「郷土玩具」概念の再構築を図っていたのだ。そして、かれはこの独自の「郷土玩具」観を、生産・流通面での改革によって実現しようとも考えていた。ゆえに「創生玩具」という概念は、[…]「郷土玩具」のあるべきもうひとつの姿として、昭和初期には機能していたのだ。」(p.116)と、それまでの「郷土玩具」観に対する批判であるとともに、「郷土玩具」概念を再構築するためであったことを指摘している。

入江は、「郷土玩具」を「いわば、〈都市〉から〈地方〉をまなざす事によって成立した、異文化表象の一形態」(p.117)と捉え、それがクリフォード以後の文化人類学によっ

て提起されてきた「文化についての語りがもつ政治性」の問題ともつながる可能性を指摘する (p.117)。そこで、問題意識として「昭和初期の〈趣味家〉が「郷土玩具」の語を口にするとき、そこではどんな「郷土」像、どんな生産者像が思い描かれていたのか。そして有坂は、こうした「郷土玩具」をめぐる語りのうちに、どんな「政治性」を見出したのか。」(p.117) ということ述べている。

彼は、昭和初期において趣味家が「郷土玩具」概念に見出した意味を検討するため、童画家で『日本郷土玩具』の著者である武井武雄および関西の玩具趣味家である川崎巨泉の「郷土玩具」観に言及している (p.119)。入江は、彼らが「郷土玩具」を〈亡びゆくもの〉としてのイメージを読み取っていたと延べ、その経緯を考えるにあたって、「郷土」という語感の影響力に着目している (p.119)。そして、「近代日本の「郷土」概念は地方民の身近な生活空間からはじまって、「民族の一团」の「過去の経歴」までもを含む幅のひろい概念であったのだ。」(p.120) と述べている。そして、「郷土玩具」の趣味家たちにとっての「郷土」像は、「柳田國男の場合と同じく、専ら〈過去〉への視線にもとづいて構築されていた。」(p.120) という。さらに、「昭和初期の趣味家が抱いていた〈亡びゆく郷土玩具〉のイメージは、おそらく「郷土」という語の懐古的な解釈によって水増しされていた。」(p.120) と述べ、実際に武井や川崎以外の一般趣味家にとっても、「郷土玩具」の魅力は「郷土」の語感にかなり左右されていた可能性について『郷土秘玩』『郷土風景』という雑誌から示している (p.120)。そして、「つまり、当時の趣味家にとって真に価値を有していたのは、実際の玩具それ自体ではない。むしろ、かれらにとっては「郷土玩具」という概念—なかならず「郷土」の語によって喚起されたイメージの方が、実際の玩具以上に魅力的だったのではないか。」(p.120) と、当時の趣味家が玩具そのものよりも、「郷土玩具」という概念、特に「郷土」というイメージに魅了された可能性を指摘している。

入江によると、昭和初期の玩具生産者たちはこの〈郷土〉を求める趣味家からの視線をよく認識し、実際に生産者の中には「趣味家の抱く「郷土」もしくは「郷土玩具」観をあらかじめ学習した上で、自製品のイメージ操作を行っていたようだ。」(p.120) と述べている。「つまり、昭和初期には趣味家由来の「郷土玩具」概念が生産者にも共有されただけでなく、その概念に合わせて実際の生産様態までもが変化を強いられたのだ。かくて、かれら生産者は「極古風」な製品づくりを目指す事により、趣味家の望む「郷土玩具」像—すなわち〈亡びゆくもの〉のイメージを、故意に演じていったのである。」(p.121) と、趣味家由来の「郷土玩具」概念によって実際の玩具の生産様態にまで影響が及んだことを指摘している。

さらに入江は有坂の「郷土玩具」概念を『旅と伝説』『郷土玩具』から読み取り<sup>1</sup>、有坂の「創生玩具」について「単に新作の「郷土玩具」というだけではない。それはむしろ、「郷土玩具即生活描写」という、有坂独自の「郷土玩具」観の具体化であったといえ

よう。」(p.123)と指摘する。さらに、有坂はこの独自の理念にもとづいた上で、特に当時都市部で趣味家が生みだしていた「郷土玩具」の鑑賞基準を一新しようと企てており、「創生玩具」の理念は趣味家への激しい批判を含むようになったという(p.123)。入江は、「この有坂の批判は、単に同時代の趣味家だけに向けられた訳ではない。それはある意味では、明治期より連綿と培われてきた〈玩具趣味〉のメンタリティそのものへの批判であったといえよう。」(p.123)と延べ、「昭和初期に流布した〈亡びゆく郷土玩具〉のイメージは、こうした明治以来の歴史的経緯にも支えられて成立していたのだ。」(p.123)ということを明らかにしている。そこでは、明治期から大正初期の玩具趣味家・清水晴風以来の趣味家たちに対する有坂の非難に言及し(pp.123-124)、有坂にとっての「郷土玩具」というものが、「生産者自身が自己の実生活をより良く表現(=「描写」)するための、いわばメディアとして機能すべきであったのだ。」(p.124)と指摘する。

そこで入江は、有坂が新しいコンセプトにもとづく「郷土玩具」、つまり「創生玩具」を介して、「郷土玩具」を取り巻く状況を変えようとした問題について、「①〈趣味家—生産者〉間における力関係、②「郷土玩具」概念における「郷土」の位置」(p.124)から検討しようとする。

まず①。入江によると、「昭和初期における「郷土玩具」のイメージは〈趣味家—生産者〉間の力関係によって支えられ、なおかつ両者間の格差をさらに拡大しつつあった。」(p.125)という。有坂與太郎は当時の趣味家としては例外的にこの一連の過程をよく理解し得る人物で、「郷土玩具即生活描写」の理念を唱えた背景には〈趣味家—生産者〉間の力関係を緩和しようという意図が働いているという(p.125)。入江は、「有坂は「郷土玩具即生活描写」の理念を介して、各地における生産者の主体性回復を図っていた。つまり、かれは「郷土玩具」をして一部の趣味家の占有物から、生産者による主体的な自己表現へと転換させようとしていたのだ。この有坂の行為は、[...]当時の〈玩具趣味〉内部における〈趣味家—生産者〉間の力関係をいったん解体した上で、新たに生産者側の視点から「郷土玩具」像を構築し直そうとする試みであった。」(p.125)と、指摘している。

②では、有坂にとって「郷土玩具」が「描写」すべき「生活」とはすなわち「郷土」のそれに他ならなかったため、生産者主導の「生活描写」の方法論が結果として「郷土玩具」概念における「郷土」の位置づけにも影響を及ぼしたとする(p.125)。入江は、「そもそも、有坂にとって「郷土」とは、懐古的などころか「近代味」のある概念であった。」(p.125)と述べ、有坂が「〈土臭さ〉のみに限定されない「ローカル・カラー」の多様なありかたを指し示すために、可能性を打ち出すために、あえて「郷土」の語を選択していたのだ。」(p.126)と指摘している。さらに、「この近代社会ならではの多彩な「ローカル・カラー」こそが、すなわち有坂のいう「生活描写」の対象だったのではないか。」(p.126)と、「生活描写」の対象が近代社会における多彩な「ローカル・カラー」で

あった可能性を示している。そして、有坂にとって、「郷土の生活」を「描写」する主体および「郷土」の何たるかを決定する権利は生産者であり、「つまり、ここでも焦点となるのは、やはり〈趣味家—生産者〉間の力関係に他ならない。有坂は、[…] 実際の〈郷土人〉ともいうべき生産者側からの視点を、新たに導入するつもりであったのだ。」(p.126)と、「郷土玩具」における「郷土」の位置なるものも結果的には〈趣味家—生産者〉間の力関係であることを示している。

論考の最後あたりになると、入江は、「郷土玩具」にみられたような地方文化の偏った表象が同時期の地方工藝論一般に広く見られた現象であった可能性を指摘し、柳宗悦の工人観を例として取り上げている (pp.126-127)。

しかし、有坂與太郎はこの地方文化の表象をめぐる弊害にやや意識的であった可能性があり、「当時の「郷土玩具」概念が〈趣味家—生産者〉間の力関係—もっといえば、〈表象する側—される側〉の力関係によって支えられている事を、よく認識していた。」(p.127)と入江は指摘する。さらに、有坂が実際に地方民の近代化を積極的に評価する点で同時期の地方工藝論者たちと一線を画していたとともに、「趣味家も生産者も等しく〈近代人〉として扱おうとするかれの姿勢は、後者に関する偏った表象を防ぐ上で、やはり一定の効果を持ちえたのではないか。」(p.127)という点に関しては、今後、他の地方工藝論者とも比較したうえで改めて再評価をする必要性について言及している。

## 1-2. 昭和初期の「郷土玩具」の新作および廃絶玩具の復興という展開から「創生玩具」を論じた研究

加藤幸治の研究はまず、郷土玩具を新作し、廃絶したものを復興したりする趣味が昭和のごく初めごろには広く普及していたことを指摘している (p.285)。加藤は、「集めるという行為から作るという行為への転換は、地域の土産物生産という国内旅行ブームや地方産業と結びつきかけていた郷土玩具においては、ある意味で必然の流れであったかもしれない。」(p.285)と、郷土玩具の製作を当時の国内旅行ブームや地方産業と関連付けている。さらに『おもちゃくらぶ』という昭和3(1928)年創刊の雑誌から、この時期には玩具作家と呼びうるような人々や郷土玩具の「復興」をグループで行う人々が活動していたことを明らかにしている (pp.285-286)。

加藤は「創生玩具」という言葉について、「昭和初期の郷土玩具趣味においてひとつのジャンルを形成するほど知られたものであった。当時の郷土玩具関係の雑誌には一般的な言葉として登場する創生という言葉の定義は実際のところよくわからないが、創作や新作、あるいはこけし研究の分野でいわれる「新型」ではなく、創生という言葉が選ばれていった過程があったはずである。」(p.286)と、「創生」という言葉が選択されていく過程に着目している。そこでは、『郷土秘玩』第1巻第5号(昭和7(1932)年)に掲載された松下正影「創作的郷土玩具所感」という文章を取り上げ、「創生玩具」に関する



論争にも言及している (pp.286-290)。加藤は「創生玩具」の論争から、「創生玩具という従来の郷土玩具蒐集とは全く異なる試みを、従来の郷土玩具と同等にコレクションの対象としていこうとしたときに、はからずもそもそもの郷土玩具のカテゴリの曖昧さが露呈した。」(pp.289-290) と、「創生玩具」という試みによって、そもそもの「郷土玩具」というカテゴリの曖昧さが露呈したことを指摘している。

こうした議論に対し、有坂與太郎は基本的には「創生玩具」を郷土玩具趣味の普及に有益と判断したため非常に肯定的だが、議論を現行の郷土玩具製作における創意工夫への問題へすり替えたところ、加藤は指摘する (p.290)。加藤は、『郷土秘玩』第1巻第5号 (昭和7 (1932) 年) 掲載の「今戸人形はなぜ高い」という有坂の文章を取り上げ、「有坂は、創生玩具の流行を否定すると、郷土玩具趣味全体が後退するのではないかと恐れていた。そこで、玩具製作の技術的展開のなかで、新素材を使用したり、流行に左右されたり、生産効率を上げるために新技術を投入したりすることをとりあげ、郷土玩具を新作するのもそうした営みのうちだという論理を作り、反対派を押さえ込もうとしたのであろう。」(p.290) と、有坂が「創生玩具」を玩具製作における技術的展開の営みのうちという論理を作り、反対派を押さえ込もうとした可能性を指摘している。しかし、こうした論争とは無関係に、東京でも地方でも廃絶玩具の復興というかたちでの玩具創作や、新作の創作玩具の頒布あるいはその品評会といったことが広く展開していたのである (p.290)。加藤はこのことについて、「郷土玩具趣味の拡散ということ以上に、国内旅行ブームによる土産物創作に求められるものが、郷土玩具が表現するその土地らしさのようなものと親和性を持っていたことが背景にあると思われる。」(pp.290-291) と、土産物創作で求められる「土地らしさ」と「郷土玩具」のそれが親和性を持っていたことが背景であると指摘している。

加藤によると、「創生玩具」は昭和初期には全国に登場し、趣味家の間で交換されるだけでなく、国内観光ブームにおいて観光土産物として量産された (pp.293-294)。加藤は和歌山と熊本における「創生玩具」の事例を取り上げ (pp.294-297)、「郷土を表現した新しい造形物を商品化したものは、創生玩具と呼ばれ、勸業館や物産館などで販売された。[...] その土地の風俗や祭、伝説に関連した人形などが全国で創作された。今日でも土産物屋や道の駅などでこうしたものが売られているが、その端緒は昭和初期に遡るのである。」(p.297) と、「創生玩具」が今日の土産物屋などで販売されている郷土を表現した造形物の端緒であることを指摘している。さらに、より国内観光ブームに結びつくかたちで創作玩具が展開した例として和歌山の「郷土玩具」趣味、そして特に松岡英之介という人物による創作郷土玩具を紹介している (pp.297-303)。加藤は、「松岡英之介の創作した土鈴は、いずれもその土地の寺社の伝説や建物に取材したものであった。彼の創生玩具は、そのまま名所の土産物となるもので、国内観光ブームの隆盛に対応したものであった。作品として公表する喜びと、それが売れる楽しみの両方が、これだけ

の種類の創生玩具を生み出す動機となったのであろう。」(p.303)と、松岡の創作した「郷土玩具」が土産物として国内観光ブームに対応するものであっただけでなく、彼自身の喜びや楽しみといった感情も「創生玩具」を生み出す動機となった可能性を指摘している。

加藤によると、昭和初期における「創生玩具」は地域の歴史や文化が表現されているかどうか、その評価を左右した (p.306)。さらに、「郷土玩具」の創作という行為については、「おそらく廃絶した郷土玩具に対する情報蒐集のうちにそれらを製作してみたくなったところから始まる。」(p.306)と、趣味家が廃絶した玩具に関する情報を集めているうちに、製作に対する好奇心が生まれたことを指摘している。「そしてそれを仲間うちに見せたり交換したりしているうちに、それ自体が蒐集の対象に含まれていった。加えて、地方の郷土史研究者にとっては、郷土玩具製作というのは文章を書くのと同じような研究成果の発表の場となっていった。地域の歴史や文化に通じていることを証明するものとして、それらを表現した郷土玩具を製作できることが、彼らの誇りでもあった。そこに、国内観光ブームに伴う土産物考案という新たな課題が生じ、郷土玩具はそれに対応するものとして商品化していったのであった。」(p.306)と、創作した「郷土玩具」は蒐集の対象となるとともに、郷土史研究者にとっては「郷土玩具」の製作が研究成果の発表と同様の意味を持ち、彼らのプライドをかけたものであったことが指摘されている。さらに、創作された「郷土玩具」は国内観光ブームにおける土産物として対応可能であったことが明らかにされているのである。

次章では、これまでの「創生玩具」に関する研究を総括するとともに、今後の課題について述べていく。

## 2. 今後の課題

前章では、「創生玩具」に関するこれまでの研究を2つ取り上げた。入江繁樹の研究では、昭和初期において玩具趣味家が「郷土玩具」を〈亡びゆくもの〉として捉え、そのイメージに沿った玩具製作を行わなければならなかった生産者との関係が論じられている。そういう状況において有坂與太郎の「創生玩具」論は、趣味家と生産者の力関係を解体し、清水晴風以降の玩具趣味家による「郷土玩具」へのまなざしを覆すために、生産者の生活を描写した「郷土玩具」(=「創生玩具」)製作を目指して提唱されたことが明らかにされている。一方、加藤幸治の研究では、「創生玩具」は昭和初期の「郷土玩具」趣味における「郷土玩具」の新作および廃絶玩具の復興という流行の中で論じられている。そこでの「創生玩具」は、地域の歴史や文化を表現していることが評価の対象となるとともに、国内観光ブームにおける土産物としても位置づけられ、さらにその創作行為は趣味家の動機付けにも関わったことが明らかにされている。以下では、①有坂與太郎の生産者に対するまなざしおよび②土産物としての「創生玩具」の2点をめぐっ

て、今後の課題を述べていくこととする。

## 2-1.「教え、導く」対象としての生産者——有坂與太郎の生産者に対するまなざしをめぐって

確かに、有坂與太郎の「創生玩具」論は今日の実産者の生活を描写すべきとした。しかし筆者は、「創生玩具」論が趣味家と生産者の力関係を解体するものであったとは言いがたいと考えている。有坂は『郷土玩具』創刊号（昭和8（1933）年）において、堤人形や博多人形が古いスタイルから脱し、新しく生まれ変わったことを語ったうえで以下のように述べている。

却て歴史を惜しみ、旧態の儘を固持してゐるが為め、名実共に亡んで了ふ事は愚の骨頂でなければなりません。かやうに時代は動いてゐるのであります。

たゞ惜しむことは、地方の実産者が時代の動く事を知つて、それに伴ふだけの力量を有してゐない事で、一勿論、全部とは云はない一之を導き善処せしめるのが我々の務めである事を信じて疑ひません。

其処で私は近代人を目標とする創生玩具を興しました。云ふまでもなく、農民美術の如く生産者自身の生活を無視したものでなく、生活描写を主眼として新らしき時代を目指して行くのであります<sup>2</sup>。

以上から読み取れるのは、時代が動くことを知るに伴うだけの力量を持たない生産者を導き、善処する主体が有坂たちということである。「創生玩具」は「時代の動く事を知つて、それに伴ふだけの力量を有してゐない」生産者を導き、善処するために興されたのである。そのように読み取ると、有坂の「創生玩具」論は趣味家と生産者の力関係を解体するものではなかったと捉えることが可能である。そのことは翌年の『郷土玩具』第2巻第1号でも窺うことができる。有坂はそこで、「昭和八年は創生玩具の試練時代であつた。昭和九年はもう一歩進んで生活の玩具化に対する精神作興の具体策をとらねばならぬ。」<sup>3</sup>と述べたあと、「先づ、各地の実産者に郷土愛の精神を培えつけねばならぬ。」<sup>4</sup>と、生産者に郷土愛の精神を教え込む目的を語っているのである。つまり、ここで筆者が問いたいのは、「創生玩具」運動において、生産者は趣味家（さらには技術者）によって「教え、導かれる」存在であり、入江が述べる形とはまた別の「力関係」が存在したのではないかということである<sup>5</sup>。その「力関係」、あるいはこの運動における生産者の立場について明らかにしていかなければならない。

有坂與太郎たち趣味家（および技術者）は生産者を指導し、彼らに「創生玩具」を製作させる。では、その「創生玩具」は最終的にどのようなルートをたどっていったのだろうか。有坂は、「尤も、需要供給の原則に反かず、需要者の階級によつては旧来の型を



其儘踏襲する場合がありますが、それとても決して新時代に即する事を忘れてはなりません。』<sup>6</sup>とも延べている。この文章からは、需要者の存在が想定されていることが窺える。つまり、「創生玩具」を何らかの形で購入する人々を有坂は念頭に置いていたのである<sup>7</sup>。それは、「『創生玩具』の商品化」という問題と関係すると筆者は考えている。

それでは、「創生玩具」を商品化するためにはどのような方法があるのだろうか。その1つとして、土産物や授与品として観光地や神社などで流通させる方法が考えられる。加藤幸治は昭和のごく初めごろには「郷土玩具」の新作および廃絶玩具を復興する趣味が広く普及していたことを指摘し、「集めるという行為から作るという行為への転換は、地域の土産物生産という国内旅行ブームや地方産業と結びつきかけていた郷土玩具においては、ある意味で必然の流れであったかもしれない。』<sup>8</sup>と述べたことを踏まえるならば、製作された「創生玩具」は最終的に土産物などとして対応できることを目的としたと考えることも可能である。

そこで、次節では観光土産物としての「創生玩具」の可能性について着目していくこととする。そのために、「創生玩具」の普及に尽力しようという趣旨でジャパン・ツーリスト・ビューロー邦人部の東京ツーリスト倶楽部内に設立された郷土玩具研究会<sup>9</sup>に焦点を当てる。

## 2-2. 観光土産物としての「創生玩具」——郷土玩具研究会の活動を中心に

上記したことではあるが、この「創生玩具」は昭和初期の国内旅行ブームおよび国内観光ブームにおける土産物に対応するものであったことが加藤の研究で明らかにされている。

筆者の手元にある『郷土玩具』誌、第1巻第1号～第2巻第1号の口絵には、特集号以外は毎号「創生玩具」が2つずつ紹介されているが、その多くが温泉や商品陳列所、神社、売店で販売・授与されているものである。ここからは確かに「創生玩具」が土産物などとして対応していることが窺える。

前節の最後に述べた郷土玩具研究会は、毎月東京で例会を開き、「創生玩具」の普及に尽力しようというのが趣旨であるとする<sup>10</sup>。この会の趣旨はもちろん「郷土玩具」研究だが、「正直をいへば、この会は既往の生産を基本とし将来に於ける対策を講究するといふ所までは行つてゐない。何故ならばこれはコレクターの会だからである。[…] 兎に角、この研究会の創設は夥しく人気を呼び、二回三回と続けてゐる内に会員は続々増加し、[…]」<sup>11</sup>と述べている。ここで興味深いのは、「創生玩具」の普及にジャパン・ツーリスト・ビューローという一組織が関わっていることである。そこでは、「創生玩具」が国内観光における土産物生産に対応できるものとして着目し、観光地の土産物などとして商品化することを視野に入れていたのではないだろうか。加藤三男は「大人の玩具としての創生玩具を作る態度」<sup>12</sup>の1つに「一、商品的価値を考慮に入れる事。』<sup>13</sup>と述べて

いる。つまり、「大人の玩具」としての「創生玩具」とは「商品的価値」を持っていないでなければならないのである。

「創生玩具」運動は、有坂などといった趣味家や技術者が生産者に指導をする形をとった。そして、製作された「創生玩具」は需要者の生活に合致したものでなければならなかった。それは「商品化」ということを念頭に入れたものであったと考えられる。それでは、どのような形で商品化が行われたのか。加藤幸治が言うように「郷土玩具」が地方産業や国内旅行ブームと結びつきかけていたとするならば、それは観光地などの土産物として対応することも目指されたはずである。実際、『郷土玩具』誌に掲載されている「創生玩具」は観光地の土産物などとして販売されているものが多い。では、生産者は「創生玩具」の製作を行うなかで（有坂など趣味家および技術者の指導を受けながら）、国内旅行ブームや国内観光ブームにいかに対応し、どのような「創生玩具」を製作することを目指したのか。

今後の研究では「創生玩具」に関わった有坂などの玩具趣味家・生産者・技術者の関係（特に生産者の立場）および、「創生玩具」の商品化（特に土産物などとして）に対する生産者の態度について明らかにすることを目的とする。特に、「創生玩具」の商品化に関しては郷土玩具研究会の活動に着目していくこととする。

## おわりに

これまでの「創生玩具」に関する研究では、「創生玩具」が今日の生産者の生活を描写するものであること、および当時の国内観光ブームにおける土産物に対応するものなどということが明らかにされてきた。特に、有坂の「創生玩具」論は、趣味家—生産者という力関係を解体するものとしても論じられていた。しかし、「創生玩具」運動を興すにあたって、生産者たちは趣味家および技術者によって「教え、導かれる」対象でもあったことが本論文から明らかとなった。そして、そのような指導によって製作された「創生玩具」は需要者の階級や生活に合致したものでなければならず、さらに商品化を念頭に置いていたことが窺える。

この「創生玩具」の商品化は、先行研究に基づくならば国内旅行ブームなどにおける土産物に対応するものとして目指された可能性がある。実際に、『郷土玩具』誌に掲載されている「創生玩具」は観光地などで販売されている土産物などが多く、さらに郷土玩具研究会の存在も見逃すことができない。今後詳しい調査を行う必要がある。

今後の研究においては、「創生玩具」運動における玩具生産者の立場、およびその商品化に対する彼らの態度について考察を行うことを目的とする。そのことは、趣味家および技術者が生産者に指導を行う際にどのような「創生玩具」の製作を求めたのかということ、当時において国内旅行や国内観光がブームとなり、「創生玩具」が土産物として対応することで生産者にどのような影響を与えたのかということについて明らかにする試

みである。

### 参考文献

- 有坂與太郎「創生玩具と我等の覚悟」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、pp.44-46  
有坂與太郎「編輯後記」、『郷土玩具』第1巻第3号、建設社、1933年、p.154  
有坂與太郎「昭和八年玩界総決算」、『郷土玩具』第1巻第11号、建設社、1933年、pp.454-457  
有坂與太郎「巻頭言」、『郷土玩具』第2巻第1号、建設社、1934年、p.1  
有坂與太郎「郷土玩具即生活描写」（『旅と伝説』第6年12月号、三元社、1933年、pp.2-6）、復刻版『旅と伝説』第12巻（通巻67号-72号）、岩崎美術社、1978年、pp.1506-1510  
入江繁樹「有坂與太郎の「創生玩具」論—昭和初期における「郷土玩具」像の再構築をめぐる一」、『品川歴史館紀要』第22号、2007年、pp.115-132  
加藤幸治『郷土玩具の新解釈 無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』、社会評論社、2011年  
加藤三男「創生玩具展に就て」、『郷土玩具』第1巻第4号、建設社、1933年、p.196  
「創生玩具指導部総則」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、ページ番号なし

### 〔注〕

1. 入江繁樹の論文では以下の有坂の文章が引用されていた（pp.122-123）。有坂は「郷土玩具」に関して、「一体、郷土玩具と云ふ言葉はいつ頃から呼びならはされたものか、さうした穿鑿は別として、私はその意味を単に地方々々で製られた玩具と云ふやうに文字通りの解釈に止どめたくないのがあります。その地方のローカルカラーが匂つてゐるもの、之は無論主眼としますが、それと俱にその生産者自身の生活が描写されてゐるもの、つまり生活の反映のないものは絶対に郷土玩具としての価値を認めないのであります。」（「郷土玩具即生活描写」（『旅と伝説』第6年12月号、三元社、1933年、p.2）、復刻版『旅と伝説』第12巻（通巻67号-72号）、岩崎美術社、1978年、p.1506）と語るとともに、「時代の推移につれ、いろいろと変化する生活を描写してゐるならば、工作技能上に、たとへ一部の懐古趣味者から顰蹙されるものがあつても、断じて郷土玩具としての価値を傷けるものとは云へません。郷土玩具は飽迄も今日のものです。民俗研究の具であり、祖先の生活を覗くための資料としてのみ、その存在価値を認むべきではないのであります。」（「創生玩具と我等の覚悟」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、p.44）と述べている。
2. 有坂與太郎「創生玩具と我等の覚悟」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、p.46。
3. 有坂與太郎「巻頭言」、『郷土玩具』第2巻第1号、建設社、1934年、p.1。
4. 上掲文、p.1。
5. 『郷土玩具』創刊号（昭和8（1933）年）には「創生玩具指導部総則」が掲載されている。「地方農村生産玩具の指導及振興」を目的とし（第2条）、指導部と技術部で組織された（第3条）。指導部は一切の庶務に従事し、技術部は工作上の実際の指導を担当するものとされた（第4条）。技術部は23人の部員が所属した（「創生玩具指導部総則」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、ページ番号なし）。確かに、入江繁樹も「創生玩具指導部」に言及し、「実際にはかれら技術者と生産者とのあいだに、〈指導—被指導〉の力関係が生じたものと思われる。」（p.132）と述べている。しかし、筆者はこの運動によって存在した力関係は生産者と技術者だけではなく、生産者と趣味家との間にも力関係が生じたと現段階では推測している。
6. 有坂與太郎「創生玩具と我等の覚悟」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、p.46。
7. 有坂が需要者の存在を念頭に入れていたことは以下の文章でも読み取ることができ、需要者の生活に見合った玩具製作を目指していかなければならないと考えていたことがわかる。

生産者にしてもそれが道楽でなく、生業であり副業であつて見れば、時代に迎合しない訳には行かない。かりに生産者の生活状態が時代に逆行して退嬰的なものであつたとしても、その需要者の生活が高かつたとしたならば、勢ひそれに合致するものを製らねばならなくなるのは当然の事で、よしんば、さうした時勢に伴つた生産品に郷土観念が没却される事があつても、時態止むを得ないのであります。

(有坂與太郎「創生玩具と我等の覚悟」、『郷土玩具』第1巻第1号、建設社、1933年、p.45)

8. 加藤幸治『郷土玩具の新解釈 無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』、社会評論社、2011年、p.285。
9. 有坂與太郎「編輯後記」、『郷土玩具』第1巻第3号、建設社、1933年、p.154参照。
10. 上掲文、p.154参照。
11. 有坂與太郎「昭和八年玩界総決算」、『郷土玩具』第1巻第11号、建設社、1933年、p.455
12. 加藤三男「創生玩具展に就て」、『郷土玩具』第1巻第4号、建設社、1933年、p.196。
13. 上掲文、p.196。